

循環社会からみた中国之道

ーグリーンイノベーションと循環型分業をキーワードにー

龍 世祥

(富山大学経済学部)

概要：本報告は、環境生態問題、人間生活問題、経済生産問題を統合できる循環社会の視座から、「道標」、「道程」、「道筋」、「道義」、「道源」、「道議」などを意味する多義的な「道」を視角にして、大歴史の視野においてみる中国発展の過程を「中国之道」という名付けにして先行研究と比較しながら、多角的に、輪郭的に考察する。そのうえで、グリーンイノベーションの推進と循環型分業の形成をキーワードに中国之道における道筋を、機能している創新メカニズムと進化メカニズムの両軸で試論する。そして、中国之道のもつ国際影響力と国際感応度の向上について検証を試みる。最後に、以上の結論を論拠として中国之道に関する、崩壊が進む「崩壊論」や脅威が進む「脅威論」などの主要な論評を論評してみるうえで、持続可能な発展に向かう中国之道が直面する新冷戦思考と新保守主義などからの阻害を言及しておく。

キーワード：循環社会、中国之道、イノベーション、循環型分業、中国脅威論

1. はじめに

〈1・1〉「中国ラベル」

中国の発展、特にその著しい経済成長およびその国際に対する影響は、いろいろな意味で世界的に感応されている。その感応度の高さを傍証できる現象として、まず、いろいろな立場に立つ人々から、いろいろな分野に従事する人々から、いろいろな価値観を持つ人々から、いろいろな発信手段を使う人々から、中国が注目されていることである。次に、この過程の名付けも「中国道路」、「中国モデル（模式）」、「中国之謎」、「中国崩壊」、「中国堀起」、「中国震撼」、「中国製造」、「中国奇跡」、「中国脅威」、「中国超越」、「中国概念」、「中国標準」、「中国特色」、「中国理念」、「中国方案」、「中国答案」、「中国知恵」、「中国主張」、「中国声音」等々の多種多様な表現がある。ここでは「中国ラベル」と呼ぶことにしておく。

中国之道の行方などについては論評が乱立しているが、代表的な見方としては、『中国崩壊論』、『中国脅威論』、『中国超越論』、『中国覇権論』等々がある。『崩壊論』と『脅威論』が日米では流行ってきたものである。前者に対しては、それが既に崩壊しつつあるという説は最近流行り始まっている。後者に対しては、それがいまだに脅威なもので、いろいろなサイドに浸透しながら、バージョンアップと版本更新を通して自己進化していると私が思っている。両者に対照して、主に中国では中国が西側を超越しつつあるという論断が確立しつつある。

〈1・2〉循環社会とは

循環社会論では、財が人工財と自然財と廃棄物から構成される広義的な概念とし

て捉えられるとともに、財の生産過程は、財の投入、財の生産及び財の産出の三段階において自然と生活に関連する広義の再生産過程として理解している。すなわち、このような理解に基づいて、ここでいう循環社会とは素材の側面から端的に言えば、人間の再生産、経済の再生産、自然の再生産から構成される広義再生産過程とその間に行われる物質、エネルギーと情報の循環を基本的な仕組みとする社会のことである。自然に支えられる人間社会は常にこの基本的な仕組みを持っている循環社会そのものである。中国社会はその例外ではない。つまり、中国之道を考察するにはこのようにした循環社会の視点はまず必要である。

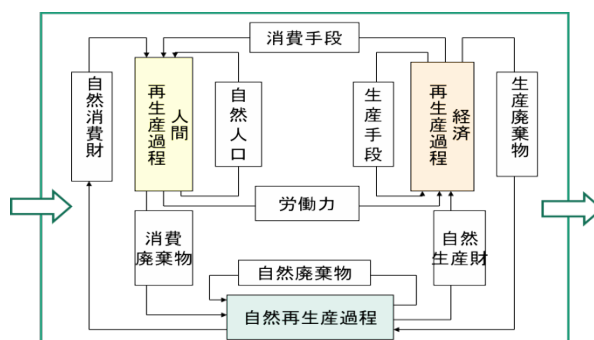


図1 循環社会図（環境経済学講義資料）

〈1・3〉「道」とは

金文では、「道」は「導」の本字であり、交差点で立つ人が走行の人に対して道を引く様を示す象形の文字となっている。日本語も古文にはこの意味でみちびくと読む「道く」がある。

その後、この意味は老子の『道徳経』をはじめ主として、①道路、道程、軌道、②道筋、道理、(行き方、行方、シナリオ)、③道義、公道、道徳、正義、④道源、本源、道元などに拡大されている。



図2 「道」の多重的な意味

特に⑤動詞として道を言う「道く」の意味は、上述したある意味で一般の物事の道を言う、「いう」と読む「道う」に転用される。

中国語では、「道」はまた「言」（う）、「云」（う）謂う、「曰」（く）、「説」（く）などと同意味でつかわれている。ところが、現代日本語では、道を言う「道く」は「導く」に、物事の筋道を言う「道う」は「言う」に代わられ、姿が完全に消える。

〈1・4〉本報告の構成

概して、本報告は、環境生態問題、人間生活問題、経済生産問題を統合できる循環社会の視座から、「道標」、「道程」、「道筋」、「道義」、「道源」、「道議」などを意味する多義的な「道」を視角にして、大歴史の視野において概観するものである。第2節では、中国発展の過程を「中国之道」という名付けにして先行研究と比較しながら、多角的に、輪郭的に考察する。そのうえで、第3節では、グリーンイノベーションの推進と循環型分業の形成をキーワードに中国之道における道筋を、機能している創新メカニズムと進化メカニズムの両軸で試論する。そして、第4節では、中国之道のもつ国際影響力と国際感応度の向上について検証を試みる。第5節では、以上の結論を論拠として中国之道に関する、崩壊が進む「崩壊論」や脅威が進む「脅威論」などの主要な論評を論評してみるうえで、最後に、持続可能な発展に向かう中国之道が直面する新冷戦思考と新保守主義などからの阻害を言及しておく。

2. 中国之道

〈2・1〉中国発展之道程

中国之道において、中国の道標として、長期的には「二つの100年シナリオ」、中期的に「三步走発展戦略」（三段階の発展戦略）、短期的には「五か年計画」が立てられている。概して言えば、アヘン戦争勃発から200年の復興之道、中国共産党創設から100年の全面的な社会達成の道、新中国成立から100年の現代強国達成の道がそれぞれ導きられる。中国之道が勃興していくには間違いない。

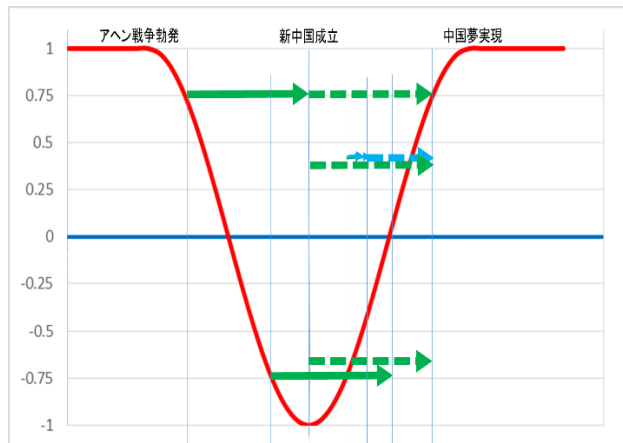


図3 中国之道に立てられる道標とその道程

ポイントは復興、小康と強国という道の到達点がどう図られる。GDPの総量から見ると、米につく第二の国となるが、人当たりに見れば、強国への道は程遠い。生活の面では、絶対的な貧困よりも相対的な貧困の撲滅が難題となり、腐敗の制度的な防止と格差の政策的な是正などのクリーン GDP を創出できるメカニズムが求められる。特に経済指標単位当たり環境負荷排出量削減を軸とするグリーン GDP で測られる強国が目指される。

〈2・2〉中国発展之道理

中国之道には、「後発優位性」という道筋があるのは先行的に研究される通りである。世界の縮図といえる多重な社会が社会発展の多段階の軌道の一つ勃興の道程に圧縮して同時に開拓できたのは、重要な道理となる。この圧縮を可能にさせるのは、統制力、指導力、実行力の強い社会主義体制と市場システムの融合、建国三十年間において蓄積してきたインフラ基盤、基礎産業体系、物的、人的資源と外国資本の融合などによって放出されたパワーである。特にこの圧縮型の道を早く通過させるのはこれまでの遠回りの道の代わりに進路を、のぼりの山越える道の代わりに隧道を開拓して直進できるからである。

この圧縮型の成功には、環境の代価も「後発劣位性」の一面として画期的にある。中国之道は、環境・資源問題の重圧力によって、グリーン発展の軌道に推し進められ、環境革命の機運に乗じ、その先端にある試験場に辿っていつている。その実証材料としては、マイクロレベルにおける ISO14001 の認定件数推移と中間レベルにおける環境産業の市場規模拡大及びその両者のマクロレベルにおける環境金融の体制整備進捗と融資金額増加などが世界をリードしていることは取りあがられる。これらは、伝統的な直線型分業が新たな循環型分業へと移行させられている傾向の実証材料として研究上で取り扱うべきであると考えられる。

〈2・3〉中国発展之道義

発展における道義の問題は、基本的に価値理念と価値分配の問題に帰結するのであるが、中国では、政策的な経済格差の是正、体制的な政治腐敗の浄化、社会的な汚染転嫁の補償などの重要な課題に具現化されている。

中国発展における対内の道義構造には、貧困扶助、農民の土地使用权の確保、農業税の廃除、農業従事補助、低収入農家保障、農村インフラ整備の財政支持、農業生態補償制などが一連の三農傾斜の価値再分配政策として一貫に実施されることが礎石となっている。現代化に向けて、三農問題は要の要として2018 一号文書によって改めて位置づけられる。

中国発展における対外の道義構造には、互恵が原則となっている。価値理念としての中国之道義の構造的転換には、循環社会から確立される人類の普遍価値観に近づきつつあることが傾向となっている。

〈2・4〉中国発展之道源

不変な道は、主として次の数点が取り上げられる。①土地と資源などを国・公的に所有する制度が堅持されること、②個別な社会階層、特定の利益集団ではなく、それらに共有される肩書、例えば、人民大衆で定義される超社会利益層を歴史的に論理的現実に代表できる政治勢力が存在すること、④正と負の両面の公共性の高い物事について、長期的な戦略目標を策定し、事態をコントロールし、計画を実行する機能、能力を有するマクロ的なガバナンス主体が継続的に組織されること、⑤世襲と民主の間に介する選抜・推薦・選挙の人事制度が熟練に利活用されていることなどである。⑥中国人の潜在意識に根付いた中華思想は生命力、包容力、吸収力、特に天人合一の調和力を持って外部の影響を受けながら進化していくこと、等々である。特に、大歴史から見れば、⑦不変で万変を迎えることはこれらの**不変な道の道源**である。

3. 中国之道におけるイノベーション・エバリュエーション

〈3・1〉無から有へとの道からの検証

老子によれば、道の基本は無中生有（無からは有が生じる）である。その言い換えとして、道とは無から有へとの道である。このように言った道は、社会発展において二つある。それはイノベーションとエバリュエーションである。

〈3・2〉周辺から中心へとの道からの検証

中国共産党は周辺部の農村・小都市から基盤と拠点を拡大して中央都市・大都市を囲んで攻めていく道を開拓して社会主義政権・制度を樹立することに成功していた。

三農経済の大国であること+マルクスプロレタリア思想から創新される毛沢東思想の下で創新される新型な中国の道である。当時の中国を主体にみれば創新となるが、全体の国際共産主義運動自身を主体に見るとこれは社会主義の進化から形成してきた、ソ連、東欧に比較できる中国の道の1つとなると考えられる。

中国共産党は周辺部の第三世界・小国家から支持と協働を拡大して欧米をはじめ第1, 2世界を囲んで攻めていく道を開拓して一つの中国を唯一に代表できる政権・政府の資格を国連で取得することに成功した。これも中国から見れば、一つの創新となるが、第三世界の勢力自身から見れば、進化となる。

中国は伝統な封建社会制度に隣接する経済の底辺に分布する周辺部の農村から改革して市場経済を導入し始めて、そして周辺部とする異質な資本主義制度に隣接する政治の先端に分布する周辺部の沿海から開放して外国資本を導入しはじめて、社会主義市場経済の道を開拓していた。これはその後一国二制度の思想の貫徹、市場資本主義経済、市場社会主義経済と国有社会主義経済の三者融合の経済体制の構築にも成功した。

〈3・3〉点から面へとの道からの検証

農村・農業の改革路線は一村・点のイノベーションによって起動され、下から上へと進化してのメカニズムで形成されるものである。更に国の上から下へとこの改革路線を都市・工業に導入させるイノベーションを行い、中国体制改革の全面的に進化が広がっている。

沿海地域の開放路線は逆に国が一点・深圳を上から下へと指定してイノベーションをさせて、この成功と影響によって、また下から上へと進化してのメカニズムで形成されるものである。更に国が上から下へとこの開放路線を内陸地域に導入させるイノベーションを進め、中国開放体制の全面的な進化が展開している。

国際レベルにおいて、中国之道に関わる新しい枠組み、体制、プロジェクトなど形成には、同様なメカニズム分析が適応できる。

〈3・3〉外から内へとの道からの検証

環境技術の移転メカニズムを例にした下図が示される多原理の内外通路を通じて「輸入⇒学習⇒吸収⇒創造⇒輸出」という外から内へとの道、エコ雁行型発展モデルがイノベーションされ、それが内外的にエバリュエーション、あるいは再イノベーションの効果を誘発する機能できる。

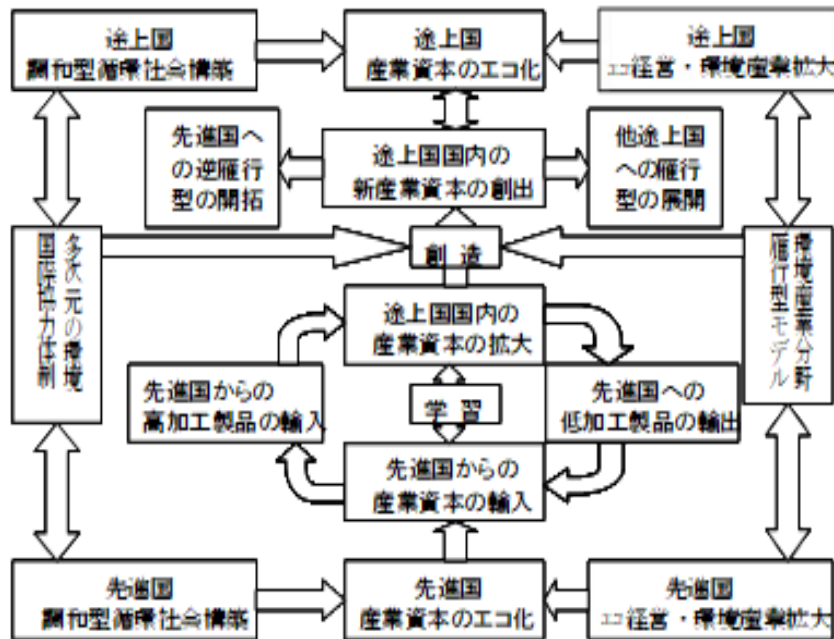


図4 エコ型雁行型モデルにおけるグリーンイノベーション

その内外通路は、地域協力体と世界協力体制の経路を加えると、それぞれ市場原理、非市場原理と準市場原理に基づいてイノベーションされた三類型に分けられる。

4. 中国之道のIC口とそのIO効果

〈4.1〉中国之道のIC

中国之道の外国とリンクするには、非市場原理が主導する人的交流（PTP）、政府開発援助（ODA）、市場原理が主導する直接投資（FDI）、国際貿易（IT）、準市場原理が主導するアジアインフラ投資銀行（AIIB）、「一带一路」（B&R）などの地域協力体と京都議定書の京都メカニズムなどの地球協力体制がICとして創設されている。中には、前述したイノベーションとエバーグリーンによっては、AIIBとB&Rのように、それ自身が新規に設置されたものもあれば、その他のように、伝統的にあるものであるが、その在り方と機能が更新されて広げたものもある。

〈4.2〉人間側面のIO効果

中国が観光者を世界に1億人以上に、日本だけでも約500万人毎年送っている。中国が受ける外国観光客数も年々増えて2016年には、1.38億人に達した。その対内効果が下図に示される来中外国留学生人数増加の勢いより十分に物語られる。

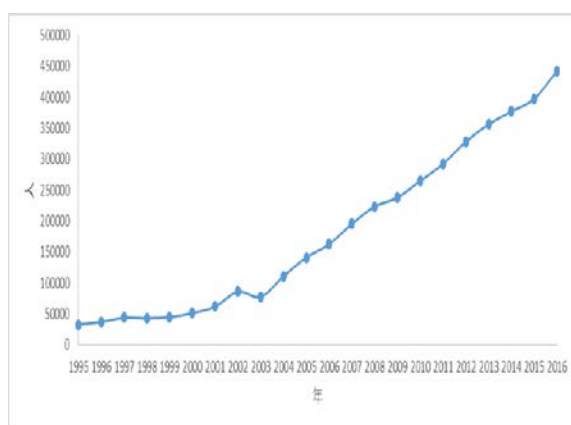


図5 中国における外国からの留学生数の推移

〈4・3〉 経済側面の IO 効果

中国統計局の公表資料によれば、世界銀行の統計データによる推計結果では、17年の中国の経済成長率は6.9%である。2012年から2016年までの間に、中国が世界経済の成長に対する貢献率は平均で34%前後に達し、米国10%、ユーロ圏8%、日本2%を合わせた貢献率よりも高くなり、世界一となっているという。

参照資料として、アメリカに比較して中国経済力の位置づけに関する下記の調査評価は取り上げられる。

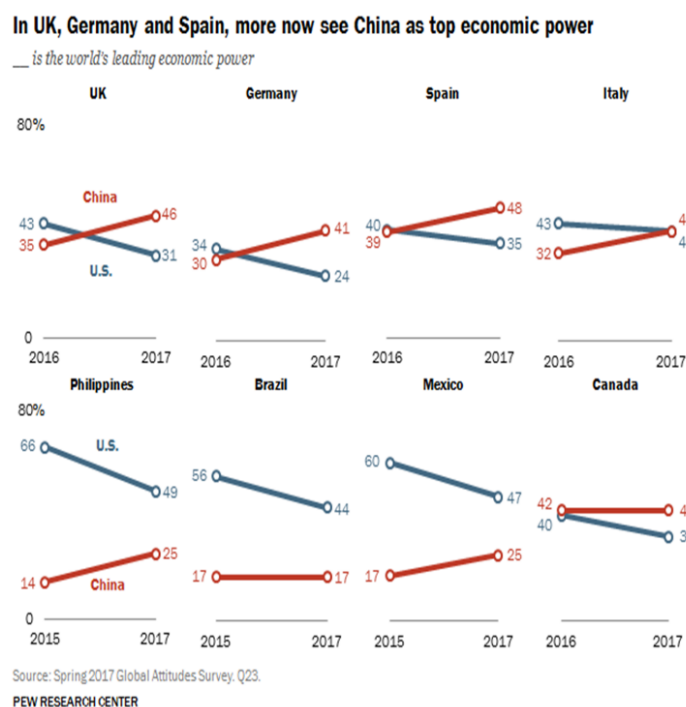


図6 経済力の中米比較について

〈4・4〉 環境側面の IO 効果

京都メカニズムのCDMと前節に述べたエコ雁行型発展モデルを通じて中国の環境

技術の吸収とイノベーションの進展が著しい。その中、風力発電、太陽光発電をはじめ再生可能なエネルギー産業の発展は世界をリーダーしている。特に新エネルギー自動車産業は世界市場シェアの大半を占めようとする勢いで急激に拡大している。

5. 中国之道の行方について

〈5・1〉中国崩壊論

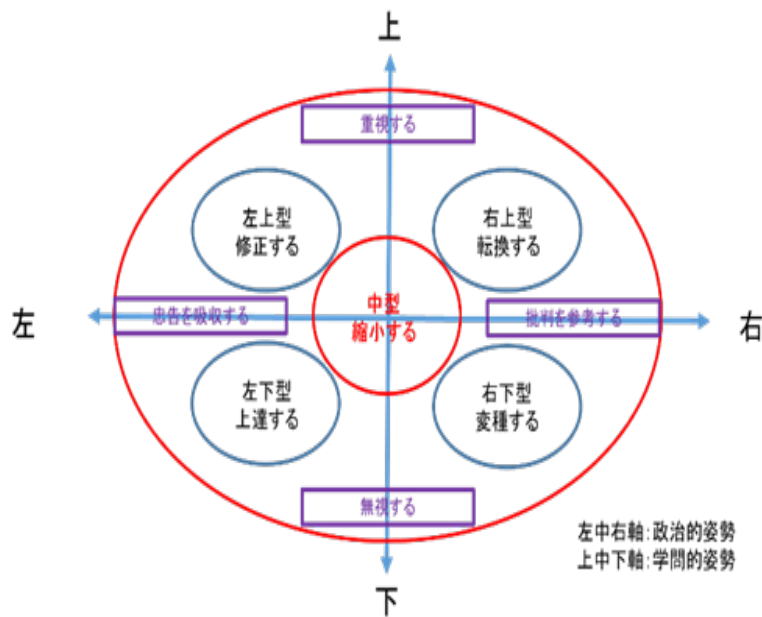


図7 中国崩壊論の構造とその崩壊後

中国崩壊論は中国之道が崩壊しないことに伴って崩壊している。これは中国崩壊論之道である。しかし、その崩壊後の行方とそれに対する中国の姿勢を考える必要がある。崩壊論は、政治的姿勢を示す左中右軸と学問的姿勢を示す上中下軸により類型化できる。崩壊論崩壊後の行方は、左右中上下の類型により、それぞれ左上型が修正する、左下型が上達する、中型が縮小する、右下型が変種する、右上型が転換するという動向が考えられる。この中国崩壊論の内容に対する中国之道は、左右上下の方向性と度合により、それぞれ忠告を吸収すること、批判を参考すること、重視することと軽視すること姿勢をとって中国之道を修繕しながら堅持して行くべきである。

〈5・2〉中国脅威論

中国脅威論が強い生命力を持って、冷戦思考や経済不振や歴史負荷などの要素に加味されて外交、国防、地域統合などの国際舞台に変容して登場する。それは、中国之道が進んでいることを反面から実証する反応として受けられるものでもあるが、中国自信論の元となる。またこのことはいくつかある意味ではかえって中国之道にとっては脅威な

のもであるが、つまり、中国之道には対外に脅威をできるパワーがすでにあると確信され、中国自信論が中国過信論へ返信してしまう。

〈5・3〉中国制覇論

これは中国脅威論の双子として成長する論点である。その変種としては、中米衝突論、中米交代論などがある。前述したように中国之道と米国之道との間には価値観の相違性が大きい。制覇の交代は成立しないが、衝突の可能性が存在する。可能性の一番高い衝突は軍事的ではなく、「普遍価値」の衝突である。価値の衝突を通じて、主流的な普遍価値観が循環社会のそれに転換されることは期待できる。

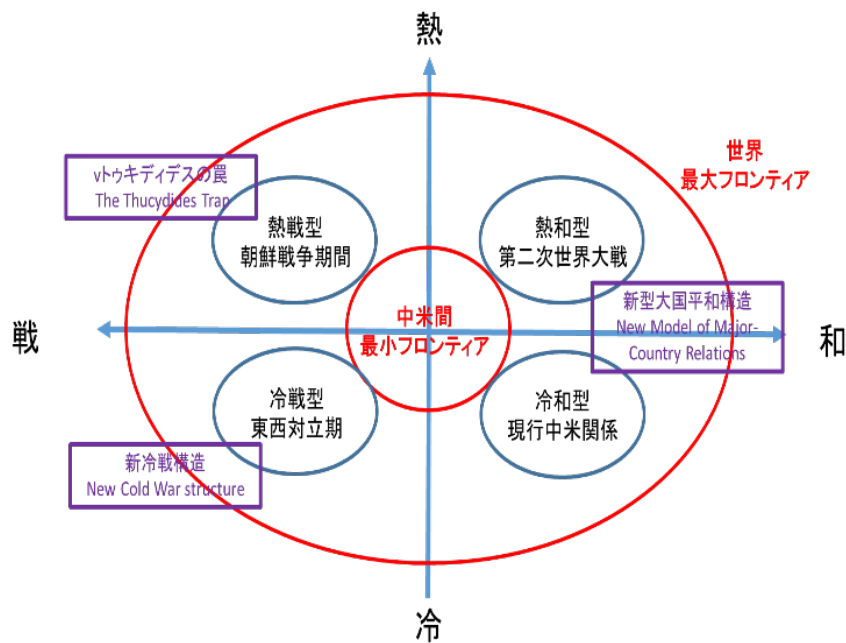


図8 中米関係の4状態：(冷，熱) × (戦，和) = (熱戦，冷戦，冷和，熱和)

6. おわりに

経済・環境・生活を和諧できる持続可能な循環社会を目指す中国にとっては、先進国にも途上国にも見本になるものではなくてグリーンイノベーションが必然に行われることである。

冷戦構造の崩壊が東の道を、ロシア式、中国式、東ドイツ式、北朝鮮式などに多岐に分岐させた。その中、中米が違う意味でその恩恵を大いに受けている国となる。共に冷戦思考を放棄することは大道に入る必須の条件となる。

注釈と参考文献（略）

（2018年8月31日提出）